

## ルフェーブル

## 『言語と社会』

Henri Lefebvre : Le Langage et la société. Gallimard, 1966. 376 p.

アンリールフェーブルはなによりもマルクス主義者である(La matérialisme dialectique, 1939 ; Pour connaître la pensée de Marx, 1948 ; Le marxisme, 《Que sais-je ? 》, 1948 ; Pour connaître la pensée de Lénine, 1957 ; Oeuvres choisies de Karl Marx, 1963)。しかしハンガリア革命とアルジェリア戦争をめぐってフランス共産党から訣別した反スターリニズムの闘将でもある(Le problèmes actuels du marxisme, 1958 ; La somme et la reste (Pris des Critiques), 1959)。かれはまたソルボンヌ大学卒業後一貫して在野に徹した著名な社会学者でもあり、フランス近世思想家に関する数々の社会思想的業績を残して

いる(Descartes, 1947 ; Pascal I, 1949 ; II, 1954 ; Didelot, 1949 ; Rabelais, 1955)。またかれは美学にも関心をよせ、ヘーゲル、マルクス主義的視点に立った Contribution à l'esthétique (1953)なる概論書を著している(もともと、著者自身、後には、これを公式主義から完全に脱却していない時期の産物だと弁明している)。

ここで紹介する新著『言語と社会』でも、当然かれのマルクス主義史観、社会学的視野がそのバックボーンをなしている。しかし言語の問題は、かれにとっていわば処女主題であり、同時にマルクス主義をめぐる論争にもかれなりに一応の「総和と余剰」を判別し終えたと考えているせいか、思想的側面はあまり前面に現れず、それよりも近代言語思想をできるだけ消化し、かつ言語という現実肉薄せんとする意図が顕著である。本書はしたがってあくまで言語論であって美学に直接関係するものではないが、文芸学を研究する者にとつて極めて有意義な示唆が含まれていると思われるので、ここで紹介することにした。

本書は八章からなっている。一、言語の問

題と問われるべき言語 (Questions de langage et langage en question)。二、新たな主知的方向とは何か (Vers un nouvel intelligible)。三、言語の複雑さと逆説 (Complexités et Paradoxes du langage)。四、理論的状况と文化的状況 (Situation théorique et situation culturelle)。五、還元 (Reduction)。六、言語の次元 (Les dimensions du langage)。七、三次元的規準、形式の理論の要約 (Le code tridimensionnel Esquisse d'une théorie des formes)。八、商品的形式と談話 (Le forme marchandise et la discours)。以下はその要約である。

今日言語の問題は言語学や哲学にかぎらずすべての科学の分野で論じられている。第一章は科学(情報理論等)、社会科学、哲学、文芸、芸術の分野における言語問題へのアプローチの仕方、およびその到達点を概観することにあてられている。ここからひき出されることは、言語を論ずるには特殊言語学にもまして哲学的見地と社会学的見地が重要だということである。

従来言語はロゴスとして思弁的知性と相関

的に論じられてきた。哲学のもっとも基本的態度は「知っているものを認識することにある」とされるが、これを媒介するものは反省であり、言語である。だがこうした意味での言語は自然的事物のように対象化されえない。すなわち言語は対象となると同時に、対象化作用そのものでもある。この両面を無視すれば、言語は現実に語られている言語とは別のものになってしまうであろう。かえって言語は主観と客観、意識と物という伝統的対立を止揚するものとして哲学的意義を有している。その意味で、ヘーゲルが単なる実在的なものから現実的なものへの弁証法的展開をロゴス(言語)に負わせたことは画期的であった。しかしながらかれは言語とロゴスを同一視することによって、言語の活動性をその反省的、思弁的性格に閉じこめざるをえなかった。だが哲学的反省の始元は思弁的要請によって見出されるのではなく、存在に基づいた提言によってなされるべきである。事実、「言語のあり方は仮説的でもなければ思弁的でもない。言語は社会的実践的である」(40)。だから、言語は《homo loquence》の言語として考察されなければならない。

書 評

さて言語の本質は分節化にある。言語は *phoneme* と *moneme* という二重の分節化水準を有するとされている。「二重の分節化の正則と概念は極めて重要であって、これによって言が規定されるほどのものである」(55)。*phoneme* とは音綴の単位であり、*signifiant* の素材である。*moneme* はこの *signifiant* から構成されるもの *signifié*、すなわち語である。「この二重の分節には同時に人間の言語を特徴づけ、かつ人間の表現の中で特に言語学的なものを特徴づける」(55)。だが、言語の第三の分節化水準として、前二者を *signification* の二水準とすれば *sens* 特有の水準があげられねばならない。*signification* は *signe* の機能だとすれば、*sens* は *super-signe* ともいふべき *phrase* に依拠している(第二章)。

これまでの言語理論では概して *signification* と *sens* の区別が不明瞭であった。それは、かれらが *signification*、つまり *signifiant* と *signifié* との二重の分節化水準によって言語を把えんとしてきたことにある。もともと *signification* は発語された語に依拠している。そこに留まるかぎり *signe* と *signe* との間の休止あるいは息つきは全然問題になってこない。これに反して *phrase* を問題にしようとするとき、われわれは語と語を切断する休止が重要になってくることに気がつく。しかも休止は単に勝手気ままに音声を切断しはしない。かえってこれがあるためにこそ時間的継続の逆転、つまり前に発語された語への回帰が可能になるのである。だがこの休止は言葉に対してもっと本質的な機能、すなわち否定性の機能を有する。「言葉の魔術的効用は、この言葉の本質的性格つまり否定性と相即している。それによって言葉は事物とその不在の中へ、換言すれば未知の不在—現在の中へ置き移し、一度に事物を疎隔し (*alienation*) 喚起し (*evocation*) かつ支配する (*puissance*)」(84)。この否定性は沈黙として現象する。「言語の中に、言語の此岸に、また言語の彼岸に沈黙がある。諸語の中に、また談話の上に意味の充実したこの夜があり、発話を待つ眼やまなざしの中に現れる清透な夜がある」(92)。フッセルはヘーゲルにくらべて一層現実的な体験に根ざした言語観を提起した。かれによれば、「*signification* (部分的) は体験されたものの中

で個的意識の前に(に対して)現れてくる。  
sens (総体的) に関していえば、それは絶対者をもって任じる哲学的意識、崇高なる判定、規範に対して(の前に)現れてくる(92)。しかしまさにこのようにして意味が問題となるところでフツセルは現実から遊離してゆく。かれの「哲学的思弁は実践から、つまり具体的活動性から遊離する。それは社会学の対象たる社会的なものを実際に無視しているか、そう見せかけるか、あるいはことさらにのように努めている」(92)。マルクスはこうした限界を克服する道を示している。かれによれば、「言語とこの感性的な柱がなければ、思想も意識も存在しない」のであり、「表象や理念は人間同士の《交通》の中に、交換の中に、意識の伝達の中で実践(社会的実践)を構成する現実的活動の中にその起源をもっている」。ここに言語を實踐の次元で論じる方向が示されている。sens もまたこれによって正当に位置づけられることとなる。signe において significant と signifié はそれぞれ差異性をふまえて分離開しえない単位である。だがこの significant と signifié の構造の分析からは sens の充実な分析

は期待しえない。それは、「signifiant と signifié とは signe の中で顔をつき合せている、しかしこのようにして規定された signe は孤立したままである」(104)という理由による。すべての言表(phrase)は文脈や状況の中に置かれて、いわば側面的に(lateral)に限定されてくるものである。この側面的限定をソシユールは valeur と名づけている。valeur は signifiant と signifié との統一をひき裂いてゆく、だから valeur が加わることによって signification は精確さを失ってゆく。だがそれは同時に sens を充実させてゆく。valeur は sens にとって本質的である。「signification と valeur は sens の分解しがたい二側面と思われる」(106)。ところでこれに関連して dénotation と connotation との区別についても述べておかねばならない。dénotation とは「指示(désignation)」、つまり signifié であり、あるいは音声的形式の内容と「よよい」(119)。またそれは「言語の認識しうる合理的機能が送り返してくるもの」(120)である。一方、connotation は「言語学者(ミル以後の)によれば、いわば「signe の情緒的知的

共鳴を示す」(120)ものと考えられている。「点の正確さを有する dénoté の周囲に connotations が置かれている」(120)。言語において、その音声的形式は語られるべき知覚対象だけに制限されることなく、発語者の心理的社会的境位もからんでくる。「そこには喚情・情緒・感情、つまり知覚の美的側面が入ってくる」(121)。それゆえ dénotation が有していた明晰性と厳密性が失われてゆく。だが、多くの言語学者が考えるように、この connotation は単に dénotation を情緒的に変様してゆくというふうに言語にとって消極的にみなしてはならない。むしろ signifiant と signifié との間の結合を解き(dé-crocher)、「その裂け目から新たに生れてくる」 dénotation 以上のものとみさなければならぬ。décrochage (R・バルトの用語法)は「なにか新しいものが通過する裂け目を暗示していて、常に connotation (sens) を変化させてゆく可能性を有している。だとすれば connotation (sens) は学の厳密さでたえうるものだろうか。少くとも dénotation と同じ意味での厳密さは与えられないだろう」(第三章)。

この décrochage をひきおこすのは valeur である。「言葉の(言語学的) valeur は語に依存する字義(signification literale)に劣らず重要である。valeur は signification を力動化する。valeur によって孤立した語は語の集団の中に入ってゆく」(203)。「signification は最初にあり、sens は究極にある。valeur は媒介者の役割を果たす」(203)。

以上の理由から言語は三つの水準を有している。したがって sens は signification をこえ出るものである。だが発語(感性的)をこえるからといって sens は非感性的なもの、したがって超人間的なものとなるのではない。sens な感性的なものの結合なくして存在しえない。sens は言語的領域に内在的であると同時に、それをこえて他の人間的実践活動へとつながってゆく。「この活動は、継時的であれ、同時的であれ、言語の内部で展開するのでなく、言語と社会、言語的形式と他の実践的活動との間の諸形式の中で展開する」(223)。その意味で「sens は signification の valeur (signification の negative) に対して同時に内在的でもあり超越的でもある」(225)。

書 評

signification は mot に属する。sens は phrase に属する。だがこの mot から phrase を区別し、phrase をして mots の羅列以上のものにするのは blanc の働きである。この blanc の問題は従来の言語研究者が概ね看過してきた問題である。

blanc は生理学的に見れば息をつくところであり、物としてみるかぎりなものでもない。だがわれわれが文章を読むとき、それはなにもをも指示していないがゆえに抽象的であるが、それにもかかわらずわれわれはそこでなにかを直接に感受している。blanc は先に述べた signification の統一をひき裂く décrochage をひき受けている。「signifiant が signifié から遠ざけられるとき、側面性(valeur)が字義性(signification)を補充するとき、余白とよばれる見えざる blanc が導入されている。とりわけ近代文学史上においては、アポリネール以後、音調が反覆進行。語の連繫を破壊することによって、そこに生れてくる blancs からやがて暗示的な super-blancs を生じさせる手法があみ出されている。だがここで注意しておかねばならないことは、このように blanc とは数学上

の計算に見られる正負号や等号といった解説されうるものではないということである。後者は二項を単純に連繫させるものにはすぎない。「言語を完全に解説可能なものとみなすこと、それは意味をふるい落とし、それを signification に還元することであり、換言すれば signe の結合物に還元することである。したがってそれは暗黙裡に blancs と super-blancs とを除去することである。逆に言語を結合関係に還元すること、それは言語を純粹数学的な仕方でも考察することであり、社会的人間の事象としての取り扱い方ではない」(231)。かくして「blancs は……意味を根柢から理解しつくすことを不可能にする」(231)。この blancs なしには phrase は考えられない。それは前と後の二つの blancs の間で展開する。それは語られた言葉の連繫を切断し、同時に両者が依然として連なっていることも強調する。phrase はしたがって signification の二つの分節化水準とは別の水準の上に立つことになる。「phrase は sens という新しい地平の上に開かれる第三の水準を構成する」(232)。blanc が表すものは valeur である。だから phrase は sig-

nification と valeur を sens の単位の中で結合するとき完全になる。だから今や従来の言語学者と袂を分けて、signification と valeur との差異性を保持しつつ、それらを一層高い統一のもとにおく sens の構造を追求してゆかねばならない。かくしてはじめて sens はそのダイナミックな様相において把握されることになるだろう。

さて以上によって signe から phrase への、あるいは signification から sens への道が示された。以後は sens の総体性を基にして言語の問題が考察されることになる。著者は言語の三次元 (tridimension) を考える。すなわち symbolique-paradigmatique-syntagmatique の三次元である。それは意識の過去—現在—未来に対応する。それはまた continuité-discontinuité (opposition)—contiguïté に対応する。すなわち symbolique d. とは活動の母胎をなす未分化の原初性や根源性を表す次元である。たとえば音楽でいえばメロディー (それは人間の声そのものに具っているものだから) にあたるだろう。paradigmatique d. とは対立の次元であり、音楽でいえばハーモニー (それは緊張—弛

緩、歓喜—悲哀、高揚—抑制といった対立を基礎にしてなりたっているから) の次元である。ここでは諸物を対立させ選択させ、この対立関係によって全体が成り立っている。syntagmatique d. とは実践活動の自由に委ねられている所与を、配列し、既に対立的に並べられている諸要素を新たな可能的連繋のもとに組織する次元である。そこに未来に向う運動が生じる。音楽でいえばリズムにあたる。言語もまたこの三つの次元で考察されることによって、その言語的実践固有の創造的の性格が保持されることになる。

次に言語の機能として三種あげられている。第一は、記号論的意味論的機能であり、signe と signe とを関係づけてゆく relationnelle fonction である。勿論ここにも言語の社会的歴史的変遷という要素が含まれているが、第二の cumulative fonction は一層社会的歴史的である。それは言語の範囲をこえて人間の全経験の蓄積を意味しているからである。第三の situationnelle fonction は、言語が現実には語られている個人的集団的状况に基いていることを意味している。最後に言語の構造として information-redundance

の対立関係が示されている。いうまでもなく前者は伝達を主とするものであり、後者は語り方、文体等を主とするものである。(ルフェールが力をこめて力説しているのは、言語形式の水準と次元のところであり、言語の機能と構造については、まだまだ論じつくしていないように思われる。かれが強調したかった点は、おそらく言語の構造・機能は単に内在的な仕方では把えられず、社会的関係においてでなければ把えられないという点であろうと思われる) (第七章)。

ところで現代社会において人間の实践活动を制約する形式として商品形式がある。これは具体的には商品固有の形式価値のことである。二つの商品の間の価値 (交換価値) 関係は  $xA$  ( $x$  量を有する商品 A) =  $yB$  ( $y$  量を有する商品 B) の方程式で表される。  $xA$  なる商品は  $yB$  なる商品の中でその価値を表現する。マルクスによれば「前者の商品は能動的役割を演じ」「関係的 (relative) 価値として表され」「後者の商品は受動的役割を演じ」「等価的 (equivalent) として機能する」「関係的価値と等価的価値は分離しえない相関的両側面であるが、同時に互に排斥し合う

「極端な対立項でもある。」最初、二つの財はそれぞれ独立した質量性を有して直接関係していない。しかし今財Aが使用価値として表され、財Bが交換価値として表されるとき、この対立は一挙に商品という形式関係に高められる。こうした商品の形式価値が普遍化され、商品の世界全体を覆うものとして金銭 (significant) がある。財は本来労働をその内実とし、必要に供される。だが財が商品的形式をもつことによってその内実は奪われ、満足されるべき必要 (signifié) は消費にとつてかわられる。かくして商品的形式は財とは異なった signification の抽象化である。

ルフェーブによれば、こうした商品のあり方に今日の言語状況は極めて類似している。言語の感性形態である parole は伝達の媒介をなすものであって、客体化されるものではなかった。それに反して、今や parole は discours となることによって、丁度商品が陳列場に置かれて売買の対象となるように、対象化 (客体化) されることになった。言語はそれを語る個人の実践 (労働) から分離した signification の体系となる。商品と

書評

言語との関係をルフェーブは次のようにまとめている。(a)「商品は交換の、触知しうる送達の、また感覚的客体による伝達の普遍的形式である」(352)。つまり商品とは抽象的であり同時に感性的である金銭 (significant の体系) によって交換される。この金銭に代表される商品的形式はそれ自体と、それ自身を含めた一群の同族物と、さらにそれを媒介として商品の全体世界を意義づけている。したがって商品的形式は一種の言語である。(b) 言語の方も、既に客体となり、文字によって parole から分離してしまつてゐるとき、一種の普遍的形式として現れ、そのようなものとして琢磨される。このようなものの完成体としてレトリックや論争術があげられる。(c) これと相關的に discours となつた言語は力の手段となる。たとえば文学者のレトリックや弁護士の論争術が有する力を考えればよい。(d) 同時に discours はそれ自体商品となり、売買の対象となる。文字や印刷術の発明はこの傾向を助長してゆく。

だがなによりも、言語を商品にするのは、言語を parole からひき離れた一個の物とする点にある。つまり本来の言語は、一人がも

う一人に語るといふふうには個人的に成立する場を描いて存在しないはずである。二人の間に交わされる parole に共通の場を作り、真の伝達を可能にするものが言語のはずである。だが文字とか印刷の発明はこうした具体的な場の喪失傾向に拍車をかけた。かくして場の成立と直接関係をもたず、それだけで自存している抽象的な discours が成立する。

「discours は significations の水平に留まるために sens を見捨て軽蔑する。そのうえ signification は valeur や sens から分離することによって、支離滅裂の《parleries》に走り自己を喪つてゆく」(363)。つまり内実のないその場かぎりのおしゃべりが始めもなく終りもなく続けられることになる。こうした言語の疎外態としての discours は言語の実践性が有していた社会的想像力を遠ざけ、貧困化してゆかざるをえない。しかもこうした言語状況は単にレトリックとか論争術にのみ見出されるのみでなく、対話を失つた言語としてラジオ・テレビ・プロパガンダを通して、換言すればマスメディア的状况の中で広く瀰漫している。とすれば言語をその窮状から救い出すためには、形而上学的、浪漫的論

及をいくら積み重ねても無意味であつて、ただ言語を商品的形式から解放し、創造的 *Parole*、つまり《ポイエシス》へと回復させる以外にはないであろう。そしてそのためには言語を社会的実践（労働）の一型態とし、《homo loquence》の地平で把え返してゆかねばならないのだ（第八章）。

以上がルフェーブルの著の大体の骨子である。ここでこれについて論評することは、紙数の面でもまた評者の知的蓄積の面でも不可能であるが、次の二点（紹介もそこに重点を置いたが）が特に注目されると思われる。すなわち一、*signification-valeur-sens* 及び *signe-blanc-phrase* の二つのトリアードについて、それぞれの差異とその連関を明確に示したこと、二、言語を商品的形式と対応させることによって、言語の疎外現象とその回復の方位を示しえたことである。特に後者については、これまで言語を社会との関係について論じた識者は多いが、大抵は言語を個人と個人との関係という一般的な社会構造に結びつけるだけで、われわれが生存している現代社会に結びつけることが少かっただけに示唆に富むものだと思われる。しかも単に現代

社会というにとどまらず、その根本的価値形式として商品形式をあげ、これをマスメディア的言語の基礎形式としたのは、かれが一方で言語の独自性を努めて保存しようとし、それを果していることを考え合せば、美事だと思われる。ただし問題点もあるように思われる。第一にルフェーブルは言語の価値（紹介文中では *valeur* としておいた）と財の価値（労働だと思われるが）とを対応させて考えているが、この二つの価値にはズレがあるように思われる。第二にもっと根本的な不信であるが、かれがすべてを *continuité-discontinuité-contiguë* の図式で論を構成しているが、これは論述の弁証法のきらいがあつて（特に言語の形式次元・機能・構造に関する節はその感が深い）、論理の弁証法になつていのかどうかという点である。そのためか、言語の始元となる《homo loquence》が、言語論においていかなる自己展開を示すのかというその道筋が不明瞭のように思われる。（もっとも言語と商品的形式との関係においては《homo loquence》としての把え方の意義は明確である。）（金田 晋）

マックス・ベンゼ

『美学』——あたらしい美学への  
てびき

Max Bense : Aesthetica——Einführung  
in die neue Aesthetik Agis-Verlag,  
Baden-Baden, 1965.

ベンゼはこれまで『Aesthetica』という表題の書を四冊（一九五四年、五六年、五八年、六〇年）あらわしているが、このたびこれら既刊の『美学』に修正・削除・補充をほどこしてこれを三四八頁の一巻にまとめた。この新著は五部にわかれ、第一部は『美学一』、

第二部は『美学二』（ちなみに『美学一』——美の形而上学的考察」と『美学二』——美的情報』については、すでに本誌に紹介済みである）、第三部は『美学三』——美学と文明、美的伝達の理論、第四部は『美学四』——美的プログラミールング、一般的テキスト理論とテキスト美学、に相当するが、第一部と第二部がほとんど旧著のままであるのになら、か第三部と第四部には大幅の変更がみられ、か